



## 目次

- [巻頭言](#) 実用英語教育学会会長 釣晴彦（札幌学院大学人文学部 教授）
- [第8回研究会報告](#)
- [実践報告①](#) 渋谷奈緒美（北海道札幌東高等学校 教諭）
- [実践報告②](#) 駒木昭子（北海道教育大学札幌校 非常勤講師）
- [ワークショップ](#) 古田 智隆（カレンナチュールジャパン ボイスワーク・トレーナー）
- [お知らせ](#)

## 実用英語教育学会 第8回研究会を終えて

実用英語教育学会会長 釣 晴彦  
札幌学院大学人文学部 教授

研究大会テーマは、「2020年東京オリンピックと日本の英語教育―話す力の原点としての発音指導再訪―」です。

実践報告者は、最初に札幌東高校の渋谷奈緒美先生が「これからの発音指導の必要性」として、発音指導は4技能を身につける土台となっていくのではないかとの考えから、3年前のワークショップの講師である古田智隆さんのボイスワークを受けての実践発表でした。渋谷先生は、実用英語教育学会では教育現場の実践を私達にいつも提示して下さる貴重な先生です。

次の実践報告者は、北海道教育大学札幌校非常勤講師の駒木昭子先生です。今年2月の研究会の基調講演者である北海道教育大学札幌校の萬谷隆一先生に「小学校英語教育の今、そしてこれから」として、講演をして頂きました。小学校英語では、話すことや聞くことを重視し読み書きにつなげる指導方法、音声のコミュニケーションの重要性を特に主張されていました。まさに駒木先生は、小学校の児童に英語の楽しさをどのように教えていくのか実践なさっている先生です。音を中心にした授業実践を研究会に参加された人達と共に共有させて頂きました。

ワークショップは、研究大会のメインである発音指導です。カレンナチュールジャパン・ボイスワーク・トレーナーの古田智隆氏の再訪です。

「spellingによる手で作る声色」をテーマに文字を言葉に戻す時、文字にする際に失ったものを少ないルールと簡単な方法で補い言葉として再現する方法を創りだした人です。最初は誰もが狐につままれた状況になりますが、段々と納得解が得られるようになり、不思議な世界観を体験しました。アルファベットの発音は学説でも様々に唱えられていますが、古田氏は発音を点から線にする

メソッドを創りだした人になります。学説としては、古田メソッドには多様な見解があるかもしれませんが、長年の音に対する研究やデータの蓄積から分析して得た貴重なメソッドだと思います。

2020年度から新学習指導要領が実施されるにあたって、今年度は移行期の最後の年になります。中学校英語教育を小学校の英語教育と活動内容にどのように生かしていくのか、また、小・中・高の連携を具体的にどのようにしていくのかは、多角的に研究され実践されてきていますが、校種の差やアプローチの多様性もあり、指導法のシェアに関しては、現場では混沌としていると考えます。特に発音の指導は、多種多様であります。筆者は、古田氏の発音指導のワークショップを受けてから、3年間考えさせられる視点が多々あり、この研究会を再度軸にして、小学校や大学、英会話を勉強している一般の人達、そして合唱指導と、音をテーマに古田氏にかなり無理なワークショップをお願いしてしまいました。総勢200人は超えましたが、古田氏のワークショップを3日間体験させてもらい、古田氏のメソッドに確信をもてるようになったのも事実です。これを機会に小・中・高・大、すべてにシェアして共通のメソッドとして研究できないかとも考えています。

実用英語教育学会の目的である、小、中、高、大で教壇に立つ会員が相互につながり、様々な領域と水準における英語教育の実践と研究を行い、実用英語の研究を理論と教育実践の両面から推進して、この古田メソッドをさらに発展させていきたいと思っています。

今後ともこの学会に関心のある皆さんの一層のご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

## 第8回研究会報告

2019年6月29日(土)に北海道科学大学サテライトキャンパスにて第8回研究会を実施しました。参加者数は31名(会員13名、非会員18名)となり、大変盛会のうちに終了することができました。講師を務めてくださいました古田智隆先生、ご発表いただきました渋谷奈緒美先生、駒木昭子先生ありがとうございました。

### 実践報告①

**発表者：** 渋谷 奈緒美(北海道札幌東高校)

**発表題：** 「これからの発音指導の必要性」

**概要：** 新入試開始まで、1年数か月となった。リスニングが50点から100点になり、リーディングは多量の問題を読みこなす力が必要となる。民間4技能試験の受験も課せられることになり英語教育の今後の方向性が示されたが、北大は民間試験を利用しないと発表し、4技能試験への反対署名など、全容がはっきりとしないままである。そのような状況のもと、高校の英語教育はどこを目指していくのだろうか？国公立二次試験では今まで通りの精読、いわゆる「お受験力」を要求されている生徒たちではあるが、高校の英語教育に求められているものは「大学に入学する力」を試される二次力だけでなく、大学や卒業してからも世界で活躍する英語力の基礎を養うことであろう。このような状況下で発音指導は「英語4技能」を身につける土台となり、さらに彼らの活躍を広げる鍵となっていくのではないだろうか。この可能性について、生徒の求めているものを軸に考察した。

渋谷先生は、常に生徒の気持ちに寄り添い、生徒に英語を使う自信を持たせるための授業を実践されている。以下が、発表要旨である。

生徒を対象とした英語の発音についてのアンケート結果から、大学受験を念頭においている進学校の生徒であっても、その多くが「ネイティブのようにカッコ良く発音したい」、と憧れを持ち、「発音を基礎から学んでみたい」と意欲を持っていることが示されている。そのような生徒の期待に応えるため、発音指導では、「使いこなすことへの憧れ」、「恥を超えていく勇氣」、「成長へつながる積極性」の3つを引き出しながら、卒業後も使える英語を実感させるようにしている。授業では、自分の町を紹介するビデオを作成したり、小学校に出張授業に出たり、海外研修後に課題と解決策について報告会を開催したりするなど、教室外とつながり、生徒が発信する機会を取り入れている。英語プレゼンテーションの指導においては、フォニックスを取り入れた帯活動を導入し、またルーブリックを使用して何度も生徒同士、あるいは教師と評価練習を繰り返し実施している。こういった日々の授業での練習量の多さが、生徒に自信をつけていくと言える。

(文責 杉浦)



## 実践報告②

発表者： 駒木 昭子（北海道教育大学札幌校非常勤講師）

発表題： 「小学校英語あるある特集」－ 音声編

概要： 来年 2020 年度から、小学校高学年に正式に教科として扱われる英語の授業。様々な不安や疑問を耳にすることが度々ある。「文字の提示や、文法事項を明示しないで英語を教えるとは、どういうことだろう？」と、中学校で初めて英語を習った世代の方々には、奇妙に思われてしまうのも当然のことである。これまで自分が小学校で実際に行ってきた音声中心の指導法の一部を紹介するとともに、小学校英語に対する誤解・疑問を解消する目的で、今回は実際に体験しながら、小学校の児童に英語の楽しさをどのように教えていくかを、フロアの皆様と一緒に考え、高めていきたい。また、実際に授業中に起こった体験談を交え、起こり得る想定をシェアしていただいた。

駒木先生は、自身が教育大学附属札幌小学校でも教えていて、そこでのご実践を中心に、ユーモアを交えてたいへん楽しくご発表して下さった。以下は発表要旨である。

最初に小学校英語の基本的な指導内容を確認したい。たとえば「文法については扱わない」「文字は必要最小限の提示にとどめる」「フォニックスは基本的なことにとどめる」等である。フォニックスをあまりがっちり教えようとする子供たちは英語を嫌いになってしまう。なぜならフォニックスは英語圏の子供たちのために考えられたもので、日本の子どもたちとは環境が違いすぎるから。

次に授業の実演を1つ紹介したい。下の「テキストA」をチャンツのように、練習をする。特に、絵を用いて音声を聞き、それを繰り返すという手順を何度も練習する。しだいに絵を、易しい単語から順に綴りにしていく。ただし子どもたちは「綴り」を「読む」のではなく「単語の場所」を見て、「こんな音だ」と認識して発音している。最後に全ての綴りを消して暗唱できるようにする。さらに bread を cookies に、shakes を ice cream など他の単語に入れ替えて練習することや、チャンツでなく普通に話す練習も必要である。



テキストA My father is a baker. I wanna be a baker, too. I wanna bake bread. I wanna make cakes. You can enjoy shakes at my shop, too.

この単元は「仕事（職業）」がテーマなので、さらに発展させて、

テキストB My mother is a teacher. I wanna be a teacher, too. I wanna teach English. I wanna make my students happy. You can enjoy music in my class, too.と「テキストA」をアレンジして「テキストB」のような文章に発展させて、子供たちに show and tell の活動をしてもらうこともできる。

最後に「小学校英語あるある」の中からいくつか留意点を紹介する。

- その1、単語全てにアクセントを置かないように。
- その2、実物やイラストを使うこと。
- その3、最初に教師が音声の手本を示すこと。子供たちに最初に言わせてはいけないこと。
- その4、場面設定はターゲットの単語や発話の使用が自然なものにすること。

結論、子供たちは暗記して英語を言えることが楽しい。音声中心で。（文責 竹内）

## ワークショップ

講師： 古田 <sup>のりたか</sup> 智隆（カレンナチュールジャパン ボイスワーク・トレーナー）

テーマ：「**spelling** による手で作る声色」—英語発音における声色の変化の重要性—

概要：言葉を文字にする際、ニュアンス全てを文字にすることはできません。文字を言葉に戻す際、文字にする際に失ったものを少ないルールと簡単な方法で補い言葉として再現する方法が【手で作る発音】。今回は、[**spelling** による手で作る声色] を中心に、手で作る子音全てをご紹介いただいた。[声色の変化とは] 英語では [母音・子音] の声色が後続する文字に向かって連続的に変化し続ける（明るくなる・暗くなる・変わらない）という、日本語にはない発音をします。「手」を使い **spelling** に秘められた声色を変える方法を、伝えていただいた。

### 【手で作る発音】

[**spelling** による手で作る声色]

【英語発音における声色の変化の重要性】

[話す言葉 [声・音] と文字との関係]



書かれた文や単語は、話す言葉 [声・音]（以下、言葉と表します）を文字に変換したもので、話す言葉の細やかなニュアンスや発音の違いまでをすべて表現出来ていません。言葉を文字にしたときに失われたものをそのまま文字から言葉に戻しても、元の言葉に完全に戻すことはできません。

それらを補うために、色々な発音方法やルールが存在しています。それらの多くが母音・子音・音節・発音記号などと、個別には細部まで構築されていますが、個々の繋がりや繋がりに伴う変化を補う方法やルールは、多くありません。

言葉は色々な要因で多様に変化を続けるため、何かルールを作ると、必ず例外事項が出てきます。例外やルールが多すぎると、それを使って発音することが大変になってきます。

話す聞く言葉として、少ないルール・簡単な方法で、言葉を文字化したときに失ったものを再現する方法が【手で作る発音】です。

英語の発音を、日本語を道具として分解・構築しようとしても、日本語にはない発音は分解も構築もすることができません。

英語の発音にある特徴をみつけ、その特徴を発音する際の連続性を持つものの一部として、個々に覚えるのではなく他の要素（\*）と互いに関連付けながら、身につけていくことが大切です。

（\*）息の吸い方、息を吐く速度、口腔・鼻腔の声を響かせる比率、息の当て方、母音・子音の連続する声色の変化、母音・子音の種類、子音長さ、二重母音、アクセント、ピッチ、速度など

この中で一番多くの要素を必要とするのが [声色の変化] です。

上記の要素の殆どが関わることで [声色の変化] が生じます。

特に重要な要素として

- ・子音
- ・母音 [ieaou] と [声の種の音] (後述)、二重母音
- ・息を当てる位置

が、挙げられます。

舌や唇を意識して動かすだけでは難しい発音も、手を使いながら発音することで、しなやかに連続性を持って動かし文字化したときに失ったものを補いながら発音することができるようになります。

「手」の動かし方・発音の仕方は、**spelling** の中に秘められています。この秘められた発音の法則を紐解き、連続的に声色を変化させ英語本来の発音に戻す方法の一つが【手で作る発音】[**spelling** による手で作る声色] です。

**講師プロフィール 【古田 智隆(のりたか)】** (カレンナチュールジャポン ボイスワーク・トレーナー)  
1969 年生まれ。北海道出身。東京レコーディングスクール卒業後、(株) HAM に入社。数々の名編曲家・アーティストから多くの教えを受ける。作曲・編曲活動のために、1992 年よりフリーランス。94 年からは、ボイスワークトレーナーとしてのキャリアをスタートさせ、ポップス、ロック、クラシックと幅広いジャンルの歌手、コーラスグループ、俳優、ナレータのボイス・トレーニングを手掛けるかたわら、全国各地でセミナーも開催している。プロからアマチュアまで、また、就学前児童から高齢者まで、さらには、音楽関係者から英語教師や同時通訳者まで、まさにあらゆるニーズのボイストレーニングにかかわっている。作曲・編曲者としては、樹里からん、古澤 巖、KoN、口笛太郎 Duo、松本俊明、夏木マリ、森昌子、石井聖子、桑田靖子、平井真美子、久保田洋司、黒澤秀樹、土井晴人、押谷沙樹、梶原 聡、TREACLE WELL、FUGA、横田裕一(Counter tenor)らの作品にかかわる。コンサドーレ札幌のオフィシャル・ジングルなど、CM や TV 番組、ラジオ番組などの制作も多数手掛けながら、NHK BS の「うたのなる木」、テレビ朝日の「少年少女 B」などに音楽講師役として自らサブレギュラー出演もしている。舞台音楽の分野でも、作曲・編曲者として、また、舞台音楽監督として活躍している。北海道舞台塾の「先進的創造活動プロジェクト“エア”」、Theater I'm の「卑弥呼」をはじめ、市町主催の市民参加型ミュージカルにも多数参加し、日本の演劇活動の普及にも貢献している。

## お知らせ

### ◆研究紀要の発行について

実用英語教育学会では研究紀要（年1回発行、査読付き、ISSN取得）を発行しております。内容については、学術的な実験・調査および理論的考察等をまとめた「研究論文」と、教育実践にもとづく知見を考察する「実践論文」の2部構成となっております。申込受付は8月末日（原稿締切は10月末）ですので、皆様の投稿をお待ちしております。

なお、投稿者資格として本学会の会員であることが規定されておりますので、まだ会員になられていない方は事前に入会手続きをお済ませくださいますようお願いいたします。

そのほかの詳しい投稿規定については、事務局までお問い合わせください。

### ◆研究大会について

2020年2月15日（土）に研究大会を開催する予定です。研究や実践について発表する場でもありますが、学校種を問わず英語教育に日頃携わる方々と率直な意見交換のできる場をつくりたいと考えております。

研究大会のテーマは後日お知らせいたします。合わせて、発表者を募集します。

### ◆会員募集について

実用英語教育学会では、新会員を募集しております。年会費は4,000円です。会員の皆様は、研究会や大会の参加費が無料になるほか、口頭発表および論文発表の発表資格を得ることができます。

## 編集後記

6月の研究会は、参加者の皆様も発音指導への関心の高さがうかがえる内容でした。これからも学校種を問わず、英語教育に携わる方々をつなぐ会にしていきたいと考えております。

それにしても、このところ急激に気温が上がり、エアコン設備のない教室はサウナ状態。夏休みまでカウントダウンをしているのは学生だけでなく教員も…かもしれません。（文責：石川）

### 実用英語教育学会

編集：SPELT Newsletter 編集委員（三浦、竹内、杉浦、石川）

発行：2019年8月1日

事務局：〒065-8567 札幌市東区北16条東9丁目1番1号

札幌大谷大学社会学部地域社会学科 石川希美 研究室内

TEL: 011-742-1651 (代表) Fax: 011-742-1654 (代)

Email: spelt.info@gmail.com